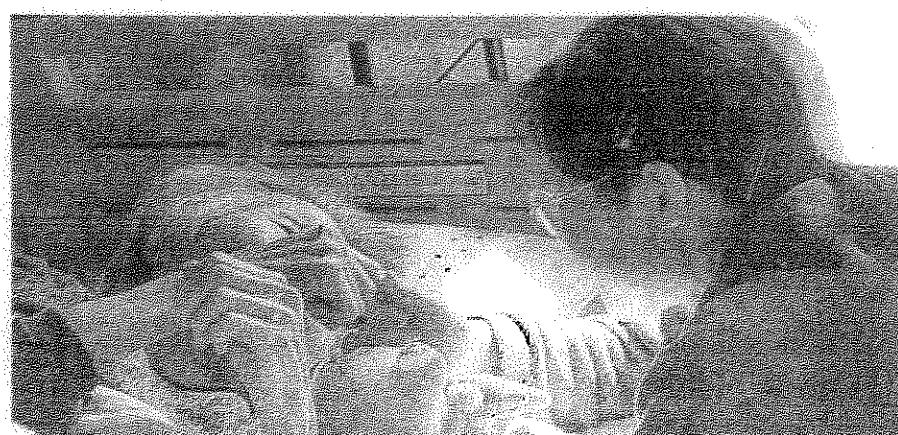


終末期介護 新しい形を

家族や親族に見守られながら自宅で迎える死をサポートする「看取り士」の普及活動に努める、一般社団法人「なごみの里」(米子市長砂町)代表理事、柴田久美子さん(61)が今年8月、初めての全国大会を東京で開く。団塊世代の看取りが本格的に始まる前に、北海道から福岡まで全国30人の看取り士と支援者、市民が情報交換し、終末期介護の新しい形を広くアピールする狙いだ。【北村弘一】



余命告知を受けた人に接する柴田久美子さん(右)。手と手を触れ合いかながら、旅立つ人の最期に付きそう=「なごみの里」提供

「認知度上げたい」 柴田さん

島根県出雲市出身の柴田さんは大手ファストフードチェーンに勤務した後、福岡県の特別養護老人ホームで高齢者介護の道に入った。しかし、現場で目にしたのは、余命宣告された入所者が本人の希望を聞き入れられずに病院に送られ、延命治療を受けながら自由を奪われる様子だった。

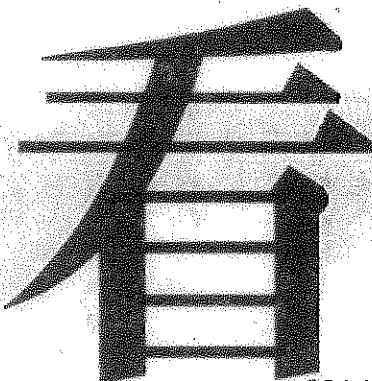
「何のためにこの世界に入ったのか」。自問するうち、理想の終末期介護を求めて、隠

岐阜県の知夫皇島(島根県知夫村)に渡った。02年に看取りの家「なごみの里」を設立。10年間にわたり、島民の理解を得ながら、本人が望むままに自然死で看取る実践を重ねた。

好きな言葉は「人生の、たとえ99%は不幸だとしても最期の1%が幸せならば、その人の人生は幸せなものに変わる」(マザー・テレサ)。



団塊世代の看取りが本格化する2025年には43万人の「死に場所」がないとの推計がある。恥ずかしながら、転勤族には家族が遠く、地域社会とも疎遠。自分の生きようを改めて考えた取材だった。(滋賀県出身、50歳)



2014.4.22

看取り士は、余命告知を受けた人が享く最も受けられる最適な方法。公的資格ではないが、介護職の人、家族、医師らと相談

員初年書(日本ホームヘルプ)。1人の看取りには24時間体制で看取り添うプログラムを構成。柴田さんが実施する看取りの達成度で、看取りにあたっての作法や生死

して24時間体制で看取り添うプログラムを構成。柴田さんが実施する看取りの達成度で、看取りにあたっての作法や生死

バー2級)以上の資格を必要としている。

これまで北海道や東北、関東、九州などの看護師や看取り士30人が整了

看取り士の全国組織の事務局がある「なごみの里」には電話相談や問い合わせが集まるが、実際に看取りを引き受けたの

は昨年23件と、認知度は思うように上がっていなかった。柴田さんは「自分で迎え方、死の迎え方、アの「エンゼルチーム」も設け、全国47支部に受

取る作業を共有してほしい」と訴える。

8月24日、東京で

看取り士、初の全国大会

全国大会は8月24日午後2時、新宿区の四谷区

展示ホール。看取り士の取り組みをサポートする医師や企業、メディアや福祉関係者でつくる実行委員会(委員長:奥壁一郎

時間体制で約10人を要するが、家族・親戚で不足する場合に同チームが補う。

柴田さんは「自分で迎える死について、どうし

ても迷惑をかけるという意識が先に立ち、家族、親戚の同意を得るのが難

い。ビジネスモデルが確立されているわけではな

い」と訴える。

・鹿児島大教授)が主催し、参加無料。奥壁委員長

や柴田さんの看取り士によるシンポジウムがあ